

特集にあたって

野々部 宏司 (法政大学), 塩浦 昭義 (東京工業大学)

OR 学会は、2017 年度に学会創立 60 周年を迎えました。本特集では、その記念事業の一環として 2017 年度から 2018 年度にかけて実施した「若手会員交流支援事業」について報告します。この事業は、各支部および本部が企画・実施する若手会員向け合宿を支援するもので、学生や若手の研究者・実務家の交流と活動の活性化を目的としています。ここでいう「若手会員向け合宿」とは、いわゆる「SSOR (エスエスオーアール)」のことを想定しています。

OR 学会との関わりの長い方はよくご存じのことと思いますが、SSOR とは、「OR 分野での主に 20 代から 40 代にかけての人材交流支援と創造的活動創出を目的とした、OR 分野における合宿形式夏季セミナー」[1] で、1965 年 (昭和 40 年) から 1998 年 (平成 10 年) まで、33 回にわたって開催されました。(表 1 参照。1975 年 (昭和 50 年) は、日本で IFORS と TIMS の大会があったため休会となったようです [2].) SSOR は学生や若手研究者にとって、世代や地域、専門分野の異なる、普段あまり接する機会のない人と出会い、友好と知識を深め合うことのできる貴重な場でした。一方で、開催期間が 3 泊 4 日程度と長く、全国から数多くの参加者が集まるイベントであることから運営面での負担も大きく、20 年前にいったん幕を閉じます。(この経緯については、本特集の金子美博先生による「SSOR 現在・過去・未来」に記載がありますので、詳細はそちらをご参照ください。)

その後、2007 年 (平成 19 年) に創立 50 周年記念事業の一環として SSOR 2007 [1] が開催されます。実行委員長の根本俊男先生 (文教大学) をはじめ、多くの方が熱意をもって準備・運営にあたられたこともあり、参加者数は歴代 SSOR の中でも (おそらく) 最多の 169 名にのびりました。9 年ぶりの開催ということもありますが、改めて、SSOR が多くの方の望むイベントであることが認識されました。そこで 2015 年、創立 60 周年に向けて記念事業の内容を準備委員会で検討する際には、当然のように SSOR の実施が候補に挙がります。運営面での負担を考えると前回のような規模での開催は困難との結論に至りますが、学会として若手が交流する場を用意することの重要性は準備委

表 1 過去の SSOR

回 (開催年)	開催地
第 1 回 (昭和 40 年)	飛騨高山 (岐阜県)
第 2 回 (昭和 41 年)	六甲, 有馬 (兵庫県)
第 3 回 (昭和 42 年)	山中湖 (山梨県)
第 4 回 (昭和 43 年)	本栖湖 (山梨県)
第 5 回 (昭和 44 年)	生駒 (奈良県)
第 6 回 (昭和 45 年)	清里 (山梨県)
第 7 回 (昭和 46 年)	吉野 (奈良県)
第 8 回 (昭和 47 年)	霧ヶ峰 (長野県)
第 9 回 (昭和 48 年)	保科温泉 (長野県)
第 10 回 (昭和 49 年)	春日温泉 (長野県)
第 11 回 (昭和 51 年)	赤倉 (新潟県)
第 12 回 (昭和 52 年)	加西 (兵庫県)
第 13 回 (昭和 53 年)	三ヶ根山 (愛知県)
第 14 回 (昭和 54 年)	霞ヶ浦 (茨城県)
第 15 回 (昭和 55 年)	伊豆修善寺 (静岡県)
第 16 回 (昭和 56 年)	近江八幡 (滋賀県)
第 17 回 (昭和 57 年)	飯綱高原 (長野県)
第 18 回 (昭和 58 年)	大山 (鳥取県)
第 19 回 (昭和 59 年)	鳴子 (宮城県)
第 20 回 (昭和 60 年)	立科 (長野県)
第 21 回 (昭和 61 年)	南紀白浜 (和歌山県)
第 22 回 (昭和 62 年)	霧ヶ峰高原 (長野県)
第 23 回 (昭和 63 年)	有馬温泉 (兵庫県)
第 24 回 (平成元年)	富士山麓 (山梨県)
第 25 回 (平成 2 年)	丹生川村 (岐阜県)
第 26 回 (平成 3 年)	軽井沢 (長野県)
第 27 回 (平成 4 年)	鳥取砂丘 (鳥取県)
第 28 回 (平成 5 年)	浜松 (静岡県)
第 29 回 (平成 6 年)	志賀高原 (長野県)
第 30 回 (平成 7 年)	南紀白浜 (和歌山県)
第 31 回 (平成 8 年)	荻崎 (茨城県)
第 32 回 (平成 9 年)	呉 (広島県)
第 33 回 (平成 10 年)	恵那 (岐阜県)
50 周年記念 (平成 19 年)	伊東 (静岡県)

員会で十分に認識しており、また、すでに九州支部や東北支部が (名称こそ「SSOR」ではないものの) 若手のための合宿形式のセミナーや発表会を開催し、成果を挙げていましたので、このような支部主催の活動を支援し、SSOR の地域版として他支部への展開を推進することは有益であろうということで、若手会員交流支援事業の実施が決定しました。

若手会員交流支援事業は研究普及委員会が担当する

表2 支部主催 SSOR（合宿形式のセミナー・発表会）

開催年度	主催支部	開催地
2010 年度	九州	大分県玖珠郡九重町
2011 年度	九州	長崎県島原市
2012 年度	九州	福岡県北九州市
2013 年度	九州、中国・四国 (共催)	山口県山陽小野田市
2014 年度	九州	佐賀県唐津市
2015 年度	東北 九州	宮城県大崎市 長崎県東彼杵郡川棚町
2016 年度	東北 中国・四国 九州	宮城県仙台市 香川県高松市 大分県由布市
2017 年度	*東北 *中部 *中国・四国 *九州	山形県山形市 愛知県蒲郡市 広島県三原市 大分県由布市
2018 年度	東北 *本部 中部 *関西 中国・四国 九州	福島県福島市 群馬県利根郡みなかみ町 愛知県犬山市 奈良県高市郡明日香村 鳥取県鳥取市 大分県由布市
2019 年度 (予定)	東北 中部 関西 中国・四国 九州	未定 愛知県蒲郡市 奈良県高市郡明日香村 香川県高松市 未定

*は 60 周年記念事業として実施、2019 年度の開催地はいずれも予定

ことになりましたが、SSOR の実際の企画・実施は各支部にお願いすることになります。2016 年の春から秋頃にかけて各支部の支部長や担当者で実施可否や開催時期、支援内容などについて意見交換をしたうえで、東北、中部、中国・四国、九州の各支部が 2017 年度に、関西支部と本部が 2018 年度にそれぞれ SSOR を実施することが決まり、60 周年記念事業としての SSOR は 2018 年 11 月をもってすべて無事に終了しました。（関東地域は支部をもたないため、本部が担当して別途実行委員会を組織しました。）本特集は、これらの開催報告として各支部・実行委員会の方々に執筆していただいた記事を取りまとめたものです。

なお、支部主催の SSOR は、60 周年記念事業として実施した後も（支部によっては実施する前から）継続して開催されています。（表 2 参照。ここでは名称に「SSOR」が含まれていなくても、若手の交流や人材育成を目的とした合宿形式のセミナーや研究会を SSOR とみなしています。）そのため本特集の記事では、60 周年記念事業だけでなく、その前後に実施された SSOR に

ついても述べられています。さらに各記事では、SSOR の開催ルポに加え、SSOR に対する執筆者の想い、実施の際の留意点、今後継続していくための課題や問題意識、ヒントなどについても言及していただいています。特に運営側の負担軽減については、多くの支部が課題として捉えています。北海道支部では今のところ SSOR を実施するに至っておらず、関東地域については、そもそも定期的に SSOR を実施する体制が整っていません。複数支部による共催や支部間での情報・ノウハウの共有など、各支部のつながりを強化することで実現できることもありそうです。SSOR の継続には、ある程度以上の熱量をもった方々の存在が前提となりますが、そのうえで、各支部と研究普及委員会が連携しながら、よりよい仕組みを作り上げていくことができると考えています。

ところで、本特集のいくつかの記事で SSOR の名称について触れられていますが、過去の SSOR に関する記事によれば、「SSOR というのは略称ではなくて正式の名称で、意味づけはいろいろとできるというきわめてユニークな名称」[2] とのことで、「“SSOR” というのは単なる記号と思った方がよく、それをいかに読むか、つまり、どのような意味を与えるかは人それぞれによって、また各回の事務局の意図によってさまざまに変わってもいいようです」[3]。今では、“Summer Seminar on OR” と解釈することが多いように感じますが、“Summer Symposium on OR” や “Summer School on OR”，さらには、開催時期を夏に限定することを避けるために、最初の S を “Seasonal” と解釈することもできるとのことです。そのため、開催時期が秋や冬であったとしても、「SSOR」と称していただいて問題はなさそうです。

最後に、ご多忙のところ本特集の記事を執筆していただきました執筆者の皆様、SSOR の実施にご尽力いただきました各支部、各実行委員会の皆様、そして SSOR にご参加いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。今後も、SSOR が OR 学会の一つの特徴的なイベントとして、OR 学会員にとって有意義で、かつ無理のない形で継続されることを願っております。

参考文献

- [1] SSOR2007, <http://open.shonan.bunkyo.ac.jp/ssor/> (2018 年 12 月 20 日閲覧)
- [2] 若山邦紘, “SSOR,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **22**(11), pp. 680–681, 1977.
- [3] 大鑄史男, 塩出省吾, “紹介 SSOR,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **31**(4), pp. 255–256, 1986.